■論文

文化と地域——文化化の観点からの試論

藤崎　康彦

1　はじめに

本稿は次の三つの契機から構想され、文化化の視点から人と文化、社会、地域の関係について私なりの整理をしてみることを目的とする。

契機の一つは文化学科の本年度新設の科目である「文化学概論」を私も半期であるが分担したことである。そこでは文化と人の関係に焦点を当て、「ヒト」としてのあり方がいかに文化を持つことを必然にするか、文化がいかに地域としては特殊なしかし人類としては普遍的な「人」を形成するかを説明した。その理論で「文化と地域」をどのように取り扱えるかは、一つの応用問題として取り組んでみる価値があると私には思われた。

二つ目の契機は、沖縄からハワイへの移民やその子孫を尋ねて一九九九年の夏ホノルルに行き、色々考えることがあったことである。ハワイに限らず、また沖縄からに限らず、移民はその母集団と受け入れのホスト社会との間で様々な経験をするであろう。その様について学ぶことは「文化と地域」についての思索へと自然に誘うものであった。

最後の契機は、本誌のテーマの一つが「文化と地域」になったことである。しかしこれはものを書くという動機付けの経過からするとむしろ最初の契機であるかもしれない。それは文化学あるいは文化研究のために多様なアプローチを可能にする、仕掛けの多い課題であり得ると思うが、私はそのうちの一つの視角からの試論を提示するのみである。

2　文化と地域

文化の概念は多様である。しかしここでは文化人類学などでの理解に従い、ある集団の有する価値や行動様式の体系として文化を定義しておく。このような、ある集団の生活習慣としての文化については、ある集団の文化と他の集団のそれには優劣の差はないと考えるのが「文化相対主義」である。しかしわざわざこういう「主義」が主張されるのは考えてみれば不自然なのである。文化相対主義に対する態度は「自民族中心主義」というが、これは文化相対主義的な概念が成立してから翻って他を言うために後から作られた概念ではないかと思う。

つまり、我々が自らの文化に感じる感覚は基本的に「自民族中心主義」的なものなのである。他の集団の文化には（何が「他」をつくり出すかはまさに生活習慣としての文化と密接な関係があり、相互規定的なものであることは、ここでは敢えて触れない。）どちらが優れているか、の価値判断抜きに接することが普通は難しいのである。

なぜそうなるのか、文化学概論で私は藤岡の『イメージと人間』の考えを基本的な骨組みにして概略次のように説明した。ヒトは本能が他の動物と異なり大幅に欠落しているように見えても、しっかりと働いている部分もある。赤子が親（養育者）と確かな絆を形成しようとする時の、母子の相互作用である。それによって子どもは愛着を形成し精神を発達させ、遺伝的な能力として持っている言語能力を開化させていく。その過程で親や周囲の人々の行動をいわば丸ごと取り込み、同一化していく。そして精神内面にイメージとして蓄積してゆく。これが文化を身につけるメカニズムであり、文化が小さな集団のあるいは狭い地域の行動様式としてしか現実には存在しない理由である。それは「言語」は存在せず個別の○○語しか存在しない理由と同質のものであるように思う。

このような過程で身につけた文化は、身につけた当人の立場ではほとんど意識されることのないものになる。それは自我に深く浸透し、その文化の行動様式に従うことが自己の安定につながるものになる。「文化化」を終えたおとなにとっては、自分の属している世界こそが安心でき、自然で、快適な世界になるのである。従って、自己と文化とは「自然的」な関係になり、食い違いや異和感はないのが普通である。つまり普通は自分の行っていることを取り立てて意識などはしないのである。

3　自我優位の文化

ところが、文化と自己との異なる関係もあり得るのでは

ないかと思った例がある。それは、文化学概論のためにあれこれ考えているときに出会った資料の中で私が衝撃に近い驚きを感じたもので、キョウコ・モリの『悲しい嘘』の中のエピソードであった。キョウコ・モリは成人してからアメリカで暮らし、既に日本で過ごした時間よりアメリカで過ごした時間が長くなった、現在四〇歳台（それも後半）と思われる作家である。紹介したいのはそのような彼女がプライベートとパブリックについて日米の感覚を比較している部分であるが、私が読み取ったものは自分と周囲の文化との関係についての感覚の差である。

キョウコ・モリが言うには、日本は「公共」の情報は豊富で行き届いているように見えるが、究極的にそれぞれの個人に関わる情報を自ら得ようとしても曖昧なままにされてしまう。好い例が医療情報であるという。カルテの開示が議論になるようなことはアメリカにはない。そのような指摘はそれはそれで良しとして、問題はここでの別なところにある。医療で言えば、能力のある（あるいは実績で信用のできると思われる）医師が適切な診断をして、総ての情報を患者に伝え、検査の意味なども説明した上で双方納得の上で治療を行うこと（これこそが今日本で声高にその実現が求められている「インフォームド・コンセント」である）が今更問題なのではない。キョウコ・モリのアメリカ人の（多分同年代か幾分若いかの）友人達はそういう（我々の言う）「西洋医学」（正統的医学）自体を信用していない人が多いという。その代わりに、伝統的な薬草を用いて治療したり、自分なりに鍼灸を含む中国医学やヨーガを含むインド医学などを試みている人も少なくないのであるという。その理由は次のようなことだ。少し長いが論述上重要なのでまとまった部分を引用する。

「しかし、選んだものは違っても、私とアメリカ人の友人たちには共通しているものがある。それは、何をどのように信じるかは個人の意志で選ぶことだと考えていること。友人たちは、単に『西洋医学』を信じようとしないだけでなく、すばらしいものだと人から教え込まれてきた西洋的で、アメリカ的で、愛国的なものすべてに反発している。国歌を歌うことも、国旗に敬礼することも、教会に行くことも、金持ちになるために懸命に働くことも。こうした理念も行動も、自分で自由に選びとったものではないから、だから彼らは信用しない。ヨガや漢方を信用しているのは、それが自分の意志で選びとったものであり、自ら本を読み、講義に通っているものだからだろう。自分で選ぶこと、そして知識をしっかり備えること。『信じる』ことにはこの二つの要素が欠かせない。」（キョウコ・モリ、一九九八：七三）

ここに現れているのは、文化と個人との特殊な関係であると私には感じられる。先に述べたように、人はある文化

に生まれつくと、その文化が極めて「自然」で当たり前で、気持ちの落ちつく快いものになるというのが、文化を個人が身につける過程を説明した「文化化」の理論の基本的理解である。信じるとか信じないとかいう意識的な態度以前にそう思ってしまっているのである。キョウコ・モリ自身も日本の現代の中流家庭で文化化を経験しているから、西洋医学に対する態度はごく素朴な自然な疑いのないもので、彼女が信用するかしないか意識的になるのは特定の医師の能力や人格についてである。

しかし彼女の友人たちの間では、そういう意識的態度以前の信頼がここではむしろ否定されているかのようなのである。彼女は友人たちから西洋医学そのものに対して信用しすぎだと考えられているという。自分にとって小さいときから当然とされてきたことであるが故にいかがわしく疑うべきものだという態度は、現象学的社会学の「生活世界」の理論を極めて納得のいくものとして思考の前提にしてきた私には驚きであった。

この問題を文化学的課題、即ち文化の理論的研究の一つの課題として考えると、いくつか説明の可能性は仮説として思いつく。多分いわゆる「西洋医学」が家庭に浸透しているレベルと程度が彼我で異なるのであろう。日本では少なくとも都会の中産家庭では「西洋医学」的以外の身体や病気に対する考え方や態度や感覚は全く失われてしまった。ところが、アメリカの、ここで話題になっているような人々の家庭ではまだ伝統的な「民間医療」的な感覚が残っていて、幼いときからそれに親しんでいる面があるのかもしれない。（西洋医学的な病因論以外の説明を持ち出すのが日常普通に見られるし、それがむしろ当たり前のようだという話をアメリカ留学をして東部の大都市の一流の大学病院で研修をした日本人医師から聞いたことがある。）「西洋医学」については家庭での文化化以降に、学校などのより広い社会での意識的教育のレベルで学習するのが主であるのかもしれない。

しかし、そうであってもそれが学校などの社会的権威を通じて学習したものに対する反感にすぐに結びつくものではない。例えば伝統的な病因論や治療法も未だに残っている地域、例えば本稿で扱いたい沖縄地方にしても、「西洋医学」と「民間医療」は対立させられるものではない。ユタといわれる伝統的シャーマンに依存する部分が沖縄にはかなりあるが、それでも「医者半分、ユタ半分」と俚諺にいわれるくらい人々は両方に依存しているのである。

アメリカの家庭での文化化で、個人についての特殊な感覚が形成されて行くことが大きい影響を持つのではないかと感じられる。何を選ぶか（信ずるか）は個人の（自由な）判断だが、人から（権威的に）与えられたものではなく、自分で選んだものでなければ信じないという態度はこ

れらの人に共通しているといえる。この態度は、自分という存在のみが確実でリアルだ、自分こそが究極の価値だという一種の個人主義の極限形態であるような気がする。あるいは極度に自他の対立に意識的である点で、文化に対する態度が個人的で、対立的で「人工的」であるといえよう。

4　沖縄での経験

これに対して、人は自分が生まれついた、その祖先につながる文化によって自然に形作られるものであるとして、それに深い信頼を抱いているかのような態度もある。これを仮に集団的で、包摂的で「自然的」な態度としておこう。最近沖縄で私が経験したことはその好い例になるであろう。

昨年春から夏にかけて、沖縄県人のハワイへの移民に関して、文化研究の視点、特にシャーマニズムの視点から気になる問題を考えるために準備をしていた。他の研究課題もかねて昨夏沖縄にわたったとき、並行して移民関係の資料収集や移民の実地調査経験者とのインタビューなどを行ったのだが、その時興味深い話を伺うことができた。

ある町からの、ハワイを含む北米やブラジルなどの南米移民の聞き取り調査を町から派遣されて数年前に実施した一人の方は、若いときから青年団などで社会的な活動をしてきた方であった。沖縄においては、社会的な活動はほとんど不可避的に反戦、反米、反基地という政治的な色彩を帯びざるを得ない時期がベトナム戦争を典型例としてあったようである。しかしその方はそのような政治的な態度に深く関与することを好まなかった。他の活動家から、沖縄本島に米軍が備蓄している（と信じられていた）核兵器が事故で爆発した場合には沖縄県人（少なくとも本島人）は全滅するがそれでも良いのかと追求されたという。その時困って先輩に相談したら、その先輩の方はたとえ本島が全滅しても海外に二〇万の沖縄県人がいる、沖縄が無くなることはない、という趣旨の話をしてくれたそうである。それで納得して、その方なりに不本意な活動に関与するのは避けたとのことであった。

このような緊張した議論とそれに対する態度決定を日常の中で不断に突きつけられる状況に生きてきた人が、自分と同時代人におられたことに私は今まで気がつかずにいた。それは真に迂闊で鈍感なことであったと始めて身に滲みて、粛然とした気持ちになったが、今はとにかく思考を続けたい。

上記のような発想には、出身地や祖先を同じくする「血の流れ」（大橋、一九九八：六二一六）の感覚を見ることができると思われるし、同時にそこには沖縄本島の地域文化

と、そこを母村、母町として出た移民達の文化とが質的に異ならないという前提が含まれていると考えて見ることも可能であろう。それはこの方のお話を更に聞いてゆくと説得的に感じられるものが確かにある。むしろ外地にこそ古くからのあるいは変わらぬ沖縄文化があるかの如くである。

この方がブラジル（であったと思う）で母町出身の移民家族を訪ねていたときのエピソードである。ある家庭でその家の主人が話していることばが沖縄本島でも既に使われなくなっているような古い沖縄ことばであったという。そのことばで家族内で話している内容がまた驚きであったそうだ。食事を与えることについての待遇表現で、主人は長男と次男以下と、家畜についてそれぞれことばを使い分けた。しかし、待遇表現の段階でいうと長男についてが一番丁寧さの程度が高く、次に家畜で（餌をやることについて、人の食事と同じように待遇表現を用いたのである）次男以下の家族成員についてはもっとも程度が低いのであったという。これにはさすがに驚いたそうである。

しかしながら古い沖縄の価値でいえばこれで良いのであるのかもしれず、まさに正統的な価値が維持されているといえるのかもしれない。沖縄は家族制度でいえば長男優先のイディオロギーが社会的に優勢になってきた歴史的経緯がある。次男以下はいわば長男に対する保険であり、家系後継者確保の観点からは予備のストックであるともいえる面が人々の意識にあったようだ。またブタを中心とする家畜も、日常の食糧としても祖先祭祀などに用いる儀礼食としても極めて重要なものである。その意味で次男より家畜の順位が高いのは理解は可能ではある。

これはいわば周圏論的な発想で説明できる現象ともいえよう。また、価値的には社会の中心よりも周縁の方がかえって伝統にこだわるような現象も生ずることは理解できる。それらは海外移民と送り出しの本の社会との関係に限らない。国内でも生じることである。

例えば、本になる母村、母町などとその出身者が本土などの都会で結成する郷愛会、郷友会等という組織が、奄美・沖縄地域の市町村に知られている。沖縄では例えば「エイサー」（沖縄本島の盆踊り。三味線や太鼓打ちを中心にしてその周りを廻りながら踊る円陣舞踊。近年若者達が独特の衣装をし、小さい太鼓と短いばちを持ち、円陣のみならず縦隊や横隊でも踊るその部分が独立して捉えられ、エイサーあるいはエイサー踊りなどといわれているようだ。）を取り入れた祭などを近年本土の各地で開いたり、奄美でも八月踊りを本土でもやったりしているのは、これらの郷土組織が中心である。八月踊りはシマ（「字」単位の集落についての、奄美・沖縄での普通の言い方）ごとに行うものである。奄美は名瀬市以外の地域は次第に過疎化

が進み人口が減少している。シマから名瀬に出てきている人たちもそれぞれのシマごとの組織を作り、名瀬の公園や広場で踊りを踊る。シマによっては八月踊りは名瀬などでの方が盛んという場合もあり得る。奄美出身者が多いところでは、本土でも似たような状況が出現しているはずである。

それ以外にもシマ（あるいはもう少し広い地域）出身者のネットワークというか連絡組織は公式、非公式双方のレベルで存在している。東京の郷土料理の店が地域出身者のたまり場になっていて、そこに行けば様々な人の消息が得られるということもある。

こういう現象を一種の文化的飛び地であるかの様に見なすこともできる。空間的な領域こそ占有はしていないが、見えない「シマ」が存在しているのである。そこに彼らの「世間」ができている。人々はその世間での行動を大事にするのである。例えば作家の田辺聖子の奄美出身の舅が亡くなるとき、京阪神在住の多くの知人達が集まり枕辺で三味線を弾き島唄を歌いながら最後を見守ったという。（注1）

このように見ると、確かにあたかも沖縄や奄美の村や町が他の地域に拡張しているかのようである。しかし、これは奄美や沖縄で育った若者が常に補充され、また本土で退職した人が引退後の生活をシマで送るために帰郷したりすることで、不断の人的交流が行われていると考えられる場合にいえるのではないかと思う。いわば常に一世が存在するのである。しかし、例えば三世や四世は本土での生活に溶け込み、特別にある地域出身であることを意識することは少なくなって行くのではないかと思う。郷愛会や郷友会は移住一世が主体の組織なのかもしれない。（注2）

では一世がまさに歴史的な一世として次第に少なくなってゆき、三世どころか四世や五世の方が人数的にも社会的にも優勢になって来ている海外の移民の子孫達の社会はどうなのであろうか。やはり文化的な飛び地なのであろうか。文化に対する態度として、いってみれば自然的な態度と意識的な人工的な態度とどちらが成立しているのであろうか。あるいは理解としてどちらが妥当なのであろうか。沖縄で抱いた問題意識に接近してみたい。

5　ハワイでの経験

ハワイの沖縄移民のことを知りたいという私なりの当初の関心は必ずしも上記のようなものではなく、むしろ沖縄シャーマニズムとそれに関係した「人格の概念」についての私のこれまでの関心に連なるものであった。それについては、今後も調査を継続してゆきたいと思っているのでここでは触れない。それは勿論「文化と地域」の考察にも深く関係するテーマではあるが、今回は経験したエピソード

から発展させ、文献のいくつかを参考にしてはじめに述べた如く、文化化の観点から考えてみたい。

ハワイには沖縄系の人々が建てた「ハワイ沖縄センター」がホノルル中心部から車で高速道路を走って三十分もあれば着くところにある。日本の普通の公立学校にあるような体育館位の大きさの、しかし作りや設備は比較にならない位に立派なホールが一棟と、会議室や資料館、事務所が収容されている別棟がその隣に建っている。全体の敷地は広く、駐車スペースは沢山作られている。

ホールは様々なイベントに用いられるが、間断なくイベントがあるわけでも総てのイベントが沖縄系の人々が主体となるわけでもないようだ。ハワイにいる民族集団（エスニック・グループ）のうち東南アジア系で、多くの成員が未ださほど経済力を持っていないグループなどは、結婚式のパーティー等にここを使って経費を節約することもあるそうである。

そのホールで、私が滞在中「ダンス・フェスティバル」が行われた。予め知っていたのだが、「ハワイ沖縄センター」の人の話では日本の「盆踊り」だということだったので、わざわざ出かけていく気はしなくて、強い関心は持っていなかった。しかし、車で連れていって下さる方がいて、急に準備なしに覗いてみた。

六時頃から開演とのことで、その少し前に着いたが、既に沢山の人が集まっていたし、更に続々と集まってきている。驚いたことにセンターのゲートの辺りに何人か銃をつるした制服警官が来場者の整理をしている。これは非番の現職警官のアルバイトなのだそうである。こういうイベントの時には警察に募集を出して、非番の警官に来てもらうのだが、日系のイベントはペイが比較的良いことや食事の提供もあったりするので、警察官には人気があるのだそうである。

ホールの外側の空き地にはテントが張られ、食べ物の屋台（food boothといっていた）が出ている。屋台は食べ物の他に、Tシャツとか色々な物品の売店もある。屋台の内部で働いている人はほとんどが青年といっていいくらいの若い人が多かった。ボランティアなのだろうが、多分沖縄コミュニティー関係の人たちだろう。食べ物は簡単なものばかりであるが、特に沖縄色はない。さりとて日本色というわけでも日本の他の地の地方色が感じられるというわけでもない。沖縄のものといえるのはサーターアンダーギー（沖縄のドーナツの様な揚げ菓子で形は握り拳の半分くらいの球形のもの）があるくらいで、他は私には起源、由来不明のものに見えた。私が食べたものは「サイミン」というカップ麺と「テリヤキ」という串に刺した肉であった。

サイミンはハワイ移民の初期の時代からあるらしい。「細麺」という字をなぜか連想したが語源は私には不明で

ある。カップ麺同様の発泡スチロールの容器に細いゆで麺が入っていて、透明なスープがかけてある。ポーク・ランチョンミートを細切りにしたようなものと日本のカップ麺に入っているような小さなると巻様のものが数片入れてある。スープの味は日本のカップ麺より薄味で和風の海産物のダシを使った味が感じられた。

テリヤキは薄切りの肉（豚か鶏か私には分からなかった）をしょうゆがベースのタレに長く浸けておいたものを焼いて串に刺したものであろう。焼き鳥のような直火で焼いたような感じはせず、まるでオーブンで焼いたように均質に焦げ目もあまりなく、肉に味が良く滲みていた。肉自体に味と色が赤く付いていて、肉の外側にタレがべたべたというものではない。

他に二三の食物があったが、特に何らかの意味で印象に残るものではなく、忘れてしまった。飲み物はジュース、コーラの類の他に暖かいものはお茶やスープがあった様に思う。むしろそういう「あったもの」ではなく「なかったもの」が印象に残っている。日本では「盆踊り」ともなれば酒は付き物だと思うが、屋台にはビールを含めて酒類の販売は一切なかった。私が会場を見て廻った限りでは何らかの酒を飲んでいる人も見なかった。持ち込んでいる人もほとんどいないようなのである。それでいて踊りが始まると、皆好い機嫌で踊っている。

踊りはホールにほとんど一杯に拡がって輪ができている。ホールの隅、周囲は折り畳み椅子がおいてあって観覧席あるいは休憩席になっている。踊っている人が百人以上、ホールに座っている人がやはり同じ位、屋台やその周辺、ホールの外にいる人も含めると凡そ三百人くらいの参加者かと思われる。この他にステージにお囃子と歌い手がいる場合がある。面白いことにステージに歌い手とお囃子が上がりいわば「ライブ」になると踊りの輪がふくらむ。踊り手達はとても楽しそうに「乗って」いる。

プログラムがホールの入口のドアのところに小さく張り出してあった。時間とその時間に演奏される曲目が並んでいるものだが、いくつかの地域は特に地域スペシャルとして表示してある。沖縄や福島などがそうである。それはそこで民謡の「社中」の様な演奏チームが出演してライブになるからである。福島のチームは相馬盆踊り歌等をやっていた。他に河内音頭もライブでやっていたから大阪のチームがいたのだろうか。ハワイ沖縄センターで「盆踊り」をやってはいてもイベントとしては日系社会全体に開放されていて、自由に参加するものであるらしい。「東京音頭」「ええじゃないか日本」「ちゃんちきおけさ」等など曲目も多様である。従って参加者も多様でもあり多数でもあるようで、今年は少し淋しいが昨年はほとんどこの二倍近くの人でにぎわっていたという様な話も聞いた。

しかし、沖縄はいわば「地元」なのでライブも一際華やかである。ステージも飾りたて、踊りの輪の中に今本島で行われているエイサーの衣装をして、太鼓を持った若者達が入り、打ち鳴らしながら一緒に踊る。歌い手は確かに発声から発音から正統な沖縄の歌い方をしていると私にも分かる。ほれぼれと張りのある好い声である。聞くところでは歌い手はハワイ生まれの人だが、沖縄に唄の修業に行き、現在は島唄教室などを開いているのだそうである。いわばプロかそれに近い人であるようだ。

踊っている人々も、私には興味深い。老若男女を問わず参加しているように見える。しかし子どもはほとんどおらず、成人のみといって良い。不思議なことに地域の民謡を選んで踊っているわけではなく、ずっと踊っているように見えることだ。踊り手が増減するのは音楽がライブかそうでないかの違いによる方が大きいと感じた。

踊っている人はほとんどが浴衣姿だが、女性には浴衣とはいえないピンクや赤の和服姿の人もいる。中には普通の和服の上に新撰組の文字を染めた羽織を着ている男性もいる。その人はどう見ても東洋人としての日本人には見えず、欧米系の体格と顔立ちをしている。この人は一際熱心にほとんど休まず踊っている。女性の中にも大柄で東洋人ではない顔立ちの女性で、和服を着てこれもまた熱心に踊っている人もいる。顔かたちのレベルでも多様な人々が一様にそれなりに揃った上手な振りで踊っているのをぼんやりと見ていると、不思議な気持ちに誘われて、何か非現実的な世界に入ったような気になってくる。唄は日本語で、周りから聞こえてくることばは英語も日本語も混じる。自分がどこにいるのか、自分が見ているものが何なのか、分からなくなるのである。

この人々はどこでこのような踊りを身につけたのだろうか。私自身は太鼓であれ何であれ何かに指揮されて他と同じ様な行動をとるのは小さいときから好きではなかったし、ましてや踊ろう等とは思ったことはなかった。盆踊りもいつも観衆の方であった。従って人々が踊っている踊りが「正しい」踊りなのか、ある曲の踊りと他の曲の踊りとどう違うのか等は全く分からない。同じようにしか踊っていないようにも見えるし、踊り分けているようにも見える。しかし、皆が揃ってちゃんと踊っている。どのような経緯をたどってこの人達は、ことに若く見える人々は、とにもかくにも今見ているような踊りを踊るようになったのだろうか。

6　文化化とアイデンティティー形成

アメリカは国籍の点では「属地主義」の国であるので、二世以降はアメリカ国籍を取得することができる。と同時

に地域社会に暮らせば普通のアメリカ人としての暮らしをすることになるのは自然なことのように思われる。しかし、戦前のハワイの場合は日系人が多かったこと、日系人のコミュニティーが濃密に形成されていたこと、日本語での教育機関が多かったこと、一世達はいずれ自分たちが帰国して日本で暮らすようになることを考え、二世に対して日本で教育を受けることを勧めることも多かったこと等の複雑な事情が絡んで、アメリカに根を下ろしてアメリカ人になる道は必ずしも当然のこととはされなかった面があるように見える。一世と二世の世代間の葛藤のもとになるような食い違いは少なくとも一部にはあったであろう。

しかし太平洋戦争の開始と共にハワイの二世達は良きアメリカ人であることを自らのアイデンティティーの根本にはっきりと据えたようだ。特にハワイ在住の人々の場合はいわゆる戦時強制収容所には、一部の指導的人物を除けば収容されていない。アメリカ本土在住の日系アメリカ人が感じた屈折した思いは比較的に少なかったのではなかろうかと想像する。勿論これは未だ資料を読み始めたばかりの私の浅はかな誤解であり、当事者のおしかりを受ける恐れは十分あるのであるが。しかし仮に私の想定が成り立つとすれば、それは沖縄系のハワイ在住アメリカ市民についても同様であったはずである。

ところが、ある方の話によれば、十年ばかり前から自らを称してオキナワンという人がハワイで多くなったように感じるという。これはちょうど母県である沖縄県の動きに対応している可能性がある。大橋によれば「これら移民と母県である沖縄県との交流が近年むしろ強まっていることである。一九九〇年、沖縄県の主催で海外の沖縄県人を招いて盛大な『世界のウチナンチュ大会』が開かれ、各種の行事が一週間つづいた。なかでも、一堂に会した会場で知事が各国の『民間大使』を任命していく情景は、沖縄がさながら一つの独立国であることを連想させた。」（大橋、一九九八：五八二―二三）のである。

確かに世界各地に居住して活躍する沖縄県人のルポルタージュが沖縄の新聞に特集として連載されたり、沖縄本島の市町村がその町村出身の移民の殊に一世達の聞き書きを採集し始めたりするのも時期的に対応するかもしれないと思う。本土では例があるのかは私には分からないが、市町村から人を派遣して面接調査をしたりする事業を沖縄では移民を出している複数の自治体が自治体ごとに行ってきたのである。

このように近年母県と移民各地との交流が深くなっていて、ハワイもその例外ではないというか、ハワイこそが少なくともその中心の一つになっているといえるかもしれない。しかし、これは新しい意識的な動きのように私は思う。そしてそれは沖縄県人が自らがおかれている政治的な

状況などに反応して独自のアイデンティティーを形成することを意味しているのかもしれない。例えば米国内で今までエスニック・グループとしては日系人の一部であったものが沖縄系として独立のグループを形成しつつあるとも考えられる。さらに米国を超えて南米等とも連携し、全世界的な「ウチナンチュ」の事業家のネットワークを形成する動きも事実始まっている。活動的なメンバーはハワイにも（あるいはハワイにこそ）いるとのことである。

ここで先のハワイの「盆踊り」に戻ってみると、今のような形で行われるようになったのはいつ頃からなのだろうかと、改めて気になる。ハワイの日系人の生活や価値観を描いた*Jan Ken Po*という本にはアラモアナ公園で一日ピクニックをして楽しむ日系人の（出身地域などの何らかの契機でまとまっている複数の）家族の様子が描かれた一章があるが、そこからは彼らの幼い子供達に自然な生活の中で「盆踊り」を身につけさせていくことのできる日常生活を想像することはできない。私の見た「盆踊り」もある面みんな上手にどこの地域の踊りもこなしているということができる。それはむしろ不自然なことだ。その時は気がつかなかったのだが、現地の人に事情を聞いてみれば、何らかの形である時期意識的に練習をし始めたことがあるのではないかと想像する。生活に根ざした文化としての盆踊りではなくて、何らかのアイデンティティーあるいは帰属意識の象徴的表現として理解した方が良いのではないかと今の私には感じられる。

沖縄で抱いた問題意識に仮に答えを出すことを試みてみよう。海外には二〇万人を超える「沖縄人」がいるといって良いだろうか。私の今の答えは「No」でもあり「Yes」でもある。無意識的な生活習慣としての文化の獲得の観点からは「No」と考えたい。食べ物等に見られる好みや、ことばを通じて獲得される価値意識や、その他の行動様式は多分ハワイとアメリカ本土と南米各地での移民の子孫達の間ではかなり異なっているであろう。太平洋戦争中、米軍に志願した日系人二世達にも、本土から来た者とハワイで育った者とで同じ日系かと戸惑ったくらい違うところがあったようだ。生物進化の例になぞらえるまでもなく、居住地域が隔離されていることが生活様式が異なって行く最大の要因である。戦争から半世紀以上経った今、自然な文化化として身につくものが同じとは考えにくい。勿論、これはこれから資料を集めたり分析したりして確かめなければならないことである。

「Yes」は意識的なアイデンティティー形成の運動の観点からの答えである。親族概念に見られるように、先の「血の流れ」のような素朴な有機体的連続性の観念に依拠して他者との連帯感を抱くことができる象徴的能力を人（人類）は持っている。その意味で同じ沖縄人という意識

をある場面で表現できれば、個別の違いは超えてまとまることが可能である。今はそれが生じつつあるのかもしれない。しかしそれは大本の「沖縄県」を所与の固定項として、海外在住者がそれに寄り添っていくようなものではない。本の沖縄自体がむしろ海外同胞を媒介にして変わりつつあるのではないか。沖縄自体が新しいアイデンティティーを形成しようとしているように感じられる。そうであれば、沖縄島に生まれた人の子孫であるだけで、さらにはそれらの人と結婚したり、それ以外の何らかの縁（ゆかり）を形成した人も含めて沖縄人ということも可能になろう。

7　おわりに

これまで述べてきたことをまとめて、人の文化化の観点からさらにはそれを超えて「文化と地域」の関係を仮に整理してみたい。先ず人にとって自らの文化が自然なものに感じられている状況の程度やあり方に注目していくつかの場合を並べてみる。

人は養育者の住む地域社会で文化化の第一歩を始めることになる。そこの地域文化の価値や行動様式を学ぶことはそこの人々との絆、即ち社会構造を身につけることを通してなされる。そのような過程でそこの土地の風土なども愛着の対象になって行くであろう。

従ってそこを離れることは、何らかの意味で当人に影響を与えることになろう。短期間であれば「ホームシック」ですむかもしれないがそれが長くなったり、生まれ育った地に戻る見込みが失われたりすると、「故郷喪失」の状態になるだろう。

しかし一度円満に文化化が終わった人は、他の土地＝文化、社会にあってもそこに対して二次的に愛着形成ができる。そういう能力を人は持っているように思う。その状態はその土地に対して「住めば都」と感じられることで表現されるだろう。

「故郷喪失」の傷を負うか、「住めば都」と楽しんでゆけるかは、様々な条件によって規定されると考えられ、今すぐには整理する資料を持っていない。しかし、いくつかの要因は想定できる。例えば、当人の気質や個性によるところもあるかもしれないが、基本的には生まれ育った文化・社会と移り住む文化・社会の関係によるところが大きいだろう。

ここまでは文化は一度身に付くと、人にとっては「自然な」ものとなるという認識で考えてきた。しかし、逆に自分の文化の中で異和感を持ち続ける人も出てくるのである。そのことを直感的に感知し、一つの文化理論として提出した人にR・ベネディクトがいる。

ベネディクトは文化を大きく描かれたパーソナリティー

になぞらえ、特定の文化は人類が持つ価値のうちの一部分しか実現できないと考えた。人類の可能的な価値全体を円に見立てるなら個別の文化はその円のうちのごく一部分の円弧に相当するものに過ぎない。これを文化の型として理解しておく。人のパーソナリティーもそのように人が実現できる性格の一部分しか実現してない。人の性格を記述することばを考えてみれば分かるように、人の性格は二項対立的な性格特性の片一方によって形成されざるを得ない。小心か大胆か、繊細か大まかか、内向的か外向的か、理知的か感情的か、禁欲的か享楽的か等など。それらの軸の片方の特性を集めた束として人のパーソナリティーを考えるとき、それらが形作る型と、先の文化の型とが合わない場合も当然考えられるだろう。例えば常に自己主張していないと無視されてしまうような「アグレッシブ」な文化には内気な人は住み難いだろう。その文化に自然に生まれ育ってもそういうことはある個人には確かに生ずるのである。文化化が自然なものであるだけに、当人にとってはその異和感の理解に苦しむであろう。このような異和感は先天的な気質や個性によるものか、後天的な文化化のある種の不具合によるものかは、今のところは分からないのである。

更に、文化によってはその文化化の過程の自然さに意識的に対峙して（自然であることに異和感あるいは敵意を持つのであるといえようか）自我が納得しない限り自らの文化を受容しない態度すら生まれてくるように見える。先のキョウコ・モリの語るエピソードに見るとおりである。

自然性の程度においてどの辺に位置づけたらよいのか今は迷うので最後においてみるが、次のような場合が更に問題になろう。即ち文化化の過程で、文化化して行く対象の社会に二重性がある場合である。つまり一次的な文化化が行われる場と二次的な文化化が行われる社会とが何らかの意味で異質性を持つ場合である。移民一世の家庭で育つ二世の立場が典型的だろうが、その他にも類似の状況は様々に生じている。

二重性のある状況では、人はそのどちらにも同様に自然な態度を形成するというわけには行かないかもしれない。周囲に同様な立場の人が多くいるか、一次的な社会即ち家庭と二次的な社会即ち広い地域社会、ひいては国家とのどちらが政治的もしくは文化的に優位な立場にあるか、等に強く影響されるであろう。この辺は移民以外にも植民地的状況等を思い浮かべることで容易に理解できるであろう。個人的な、あるいは集合的なアイデンティティーに敏感になる一つの契機であると想像できる。

このように、文化研究の課題としての移民とその子孫達に関する研究は可能であろうことは私なりに確認しておきたい。しかしそれは狭く移民そのものにこだわるのではなく、類似の概念と関連させることで広い視野を獲得するこ

とによってより有効な研究となりうる。それらは人と文化の関係、人のアイデンティティー形成等の考察の、一つの社会的実験の場として理解することができる。但し概念は注意して整理しておかなくてはならない。

例えば移民と出稼ぎについてである。帰属意識を母村などに持ち、特に単身で生地を離れて働いている場合などは海外移民とはいっても現象的に国内の出稼ぎと変わらない。現に「出稼ぎ移民」という表現もあるくらいだ。仮に挙家離村してもいずれ「故郷に錦を飾る」つもりならば出稼ぎと大きな差はない。笠戸丸と、あるいは『蒼氓』に描かれた「ら・ぷらた丸」とメイフラワー号の乗客は同じではないように思う。

それが日本独特の「移民」概念を生み出すのではないかと思う。このような問題を考え始めてようやく気がついたが、移民とimmigration, emigrationあるいはimmigrant,emigrantとは意味が同じではない。英語ではその言葉は移住した当人達にのみ使われるように思う。子孫自身は少なくともアメリカでは移民とはいわない。ところが日本語の移民は包括的な広い意味を持ち、その子孫達も同質のカテゴリーとしてしまう。だからこそ一世のみならず二世、三世ということばが何の不思議もなく時間空間を超えて彼らを母国に結びつけてしまうように使われる。英語にissei, nisei, sansei, kibei, などということばが取り入れられて日系人についてのみ使われるのはそのためであろう。これは私には日本独特の「人のカテゴリー」の立て方であるように思われる。海外で何代暮らしてもそこに移住した日本人の「二世」や「三世」なのである。これがそのままいつまで経っても日本で帰化人の家系として特別なカテゴリー扱いされる場合が生じたり、「在日」という人のカテゴリーが成立していることに、逆にしかし同じ根でつながっているように思える。移民研究と日系アメリカ人などの研究とが同じカテゴリーで捉えられてしまうのはやはりおかしい。そういう意味では私のこの議論も同じ過ちから出発していたと思う。私が関心を抱いたのは「ハワイ在住沖縄系アメリカ人」の文化であったというべきであろう。

ここから、地域や文化化やアイデンティティー形成の関連の視点からは、移民のみならず植民地の人々の問題、さらにはインターネット時代の地球市民の問題に迄視野は拡大すると思うが、それらは今後の課題にしたい。

謝　辞

ハワイ出張には跡見学園女子大学後援会の平成十一年度海外出張助成金の交付を受けた。記して関係各位に感謝したい。

ハワイでの沖縄コミュニティー研究に関しては、ハワイ大学教授で琉球史がご専門の崎原貢博士にご指導と援助を

いただいた。感謝申し上げたい。教授の導きなしには理解を進めることはできなかった。しかし進み方が遅いのはひとえに私の責任である。

ホノルル滞在中は崎原博士に引き合わせていただいた多くの方々からご好意を受けることができた。お一人お一人お名前を挙げることができないくらいなので、その旨お許しいただいてまとめてお礼を申し上げたい。

また、ハワイ大学に留学されている成城大学大学院の岡野宣勝氏ご夫妻からは学問的刺激と日常的ご好意の両方を受けることができた。氏も沖縄出身の夫人も沖縄コミュニティーを対象とした研究を進めておられ、その成果が期待される。ことに沖縄系の人々のアイデンティティー形成についての氏の研究は価値のあるものになると思われる。

本学文化学科の講師を務めてくださっている武田道生先生にはハワイでの日系宗教のご自身の研究を教示いただいた上、教団の紹介もしていただいた。今回はそれらのご教示を生かすことができなかったが、今後の課題としたい。

注

注1　日本経済新聞の「私の履歴書」に掲載された文章にあったが、掲載時期などは手元に記事がないので未確認。

注2　沖縄の郷友会については石原一九九六を参照。奄美についてはいくつか研究が過去に発表されたことは承知しているが、書誌的情報を調査することが今回はできなかった。

参照文献（直接言及したもののみ）

ベネディクト　R.　一九七三『文化の型』社会思想社

藤岡喜愛　一九七四『イメージと人間』日本放送出版協会

石原昌家　一九九六「越境者のライフ・ヒストリー」谷一九九六所収

石川達三　一九三九『蒼氓』新潮社（新潮文庫）

モリ　キョウコ　一九九八『悲しい嘘』青山出版社

大橋英寿　一九九八『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂

Ogawa, Dennis M. 1973 *Jan Ken Po* University Of Hawaii Press.

谷富夫編　一九九六『ライフ・ヒストリーを学ぶ』世界思想社

（ふじさき　やすひこ・文化人類学）